

短期海外研修の成果と意義

— 学生の報告書とアンケート調査の結果から —

Result and Significance of Overseas Study Short Program -The result of the Questionnaires and the Reports-

松田 康子
Yasuko MATSUDA

今年度で15回目になる海外研修の最近の研修成果を報告し、加えて、学生の報告書やアンケート調査の結果を3つの時期のグループに分けて比較する。回数を重ねても変わらない学生の成果がある一方、年とともに参加者が減少していることに加えて、学生たちの意識が少しずつ変化していることも分かった。海外研修に参加する学生の研修前の調査で「英語が心配」であることは3つのグループ共に同じであるが、第1回から第3回の学生と比べると第13回から第15回の参加学生は英語が大変心配だと思ふ気持ちが薄れている。ホームステイに対しても年々あまり心配していない学生が増えている。事前研修を充実させた結果とも考えられるが、より気楽に研修に参加をしている傾向が大きくなったとみられる。事前研修での目的意識の確認が課題である。

This reports the results of overseas study short programs which were continued for 15 times in our college. First, I report the recent study programs in Los Angeles. In addition, I divided the results of the reports and questionnaires of the participants into 3 groups by different periods and compared their results. There were the same results and changed ones. The number of participants decreased year by year and their purpose of this program were gradually changed. Just before the departure of the overseas programs, I asked the students what worries and hopes the students had. All three group students were worried about English, but the students of 13th -15th study program were not so worried about English. Also recent students were not so worried about the homestay. Perhaps that was why our preparation was practical, but they were apt to participate in this program at their ease. Our aim is to make them sure why the students participate in this program.

キーワード：短期海外研修、事前研修、ホームステイ、アンケート

overseas study short program, preparation of study tour, homestay, questionnaire

1. はじめに

本学の海外研修は平成6年度から年1回実施し、平成22年度で15回目となった。研修場所はオーストラリアのシドニー・ブリスベン、アメリカのロサンゼルスと変わり、プログラムの内容も改良してきた。参加学生は15回の実施で合計398人になる。参加学生数は年々減少して、学生たちの参加意識にも変化が見られるようになった。

今回、第13回から第15回のロサンゼルスでの研修の成果を報告するとともに、以前報告した①第1回から第3回海外研修（平成10年の報告、研修場所はシドニー、参加者合計118人）¹⁾、②第8回から第11回の海外研修（平成19年の報告、研修場所はブリスベン、参加者合計112人）²⁾、③第13回から第15回の海外研修（研修場所はロサンゼルス、参加学生合計35人）についてアンケート調査の結果を比較し、変化していないと思われる点と変化したと思われる点を報告する。

2. 本学の海外研修

本学の海外研修は第1回から第7回まではシドニー、第8回から第12回まではブリスベン、第13回から第15回まではロサンゼルス各大学のキャンパスで実施してきた。「広く世界の歴史と文化を学び、正しい歴史観を確立する」という本学建学の精神に沿って、異文化体験と語学学習をするという目的で現地の大学における英語研修とホームステイを組み合わせ始めた。本学は英語が専攻でないため、専攻分野に合わせて学生たちがより興味を持てる体験を加えた独自のプログラムを作り上げていった。具体的には学生が目指している栄養士に関連して、現地の栄養士の講演、給食管理者の講演と給食施設内見学、現地のスーパーマーケット比較見学などをプログラムに入れている。現地大学での半日の語学学習の内容も、午後からのフィールドワークに関連するものやホームステイで役立つ英語の学習に絞ることなど、要望を伝えて実施してきた（表1）。

3. 海外研修の成果

ロサンゼルス郊外の大学で実施した第13回から第15回の海外研修におけるアンケート調査と報告書の内容について報告する。

（1）ホームステイ・異文化体験

第1回から第12回までのオーストラリアにおける研

修と、ロサンゼルスでの研修における最も大きな違いは、学生の移動手段であった。オーストラリアでは学生たちは通学や休日に公共交通機関を使って自分たちで行動していたが、ロサンゼルスでは公共交通手段がないため、大学のバスを利用するかホームステイ先が送迎するかであった。学生たちはホストファミリーに頼りたくないという意識が強いため、休日の過ごし方もホストファミリーとの重要な話題になっていたようである。ホストファミリーと過ごして楽しかったことについては、多くの学生は「夕食後の団らん」と答え、「話が絶えなくて常に笑っていた」、「好きな食べ物や歌手の話で盛り上がった」、「観光パンフレットには載っていない素敵な場所に食事に連れて行ってもらった」、「家族でゲームをしたり子どもたちと遊んだ」等をあげている。ホームステイ先で困ったことは、生活面ではなく、「英語のコミュニケーション」と答えている。学生たちは「ホストファミリーは自分たちが英

表1. 海外研修日程

第1日目	中部国際空港出発 日付変更線通過 ロサンゼルス着 簡単な市内観光 大学でホームステイ先と対面、ステイ先で昼食
第2日目	午前 大学でクラス分けテストと英語研修 午後 大学周辺の見学
第3日目	午前 英語研修 午後 ビバリーヒルズ見学
第4日目	午前 英語研修 午後 ハリウッド見学
第5日目	ディズニーランド見学
第6日目	午前 英語研修 午後 特色のある3つのスーパーマーケット比較見学
第7日目	ホームステイ先で自由行動
第8日目	ホームステイ先で自由行動
第9日目	午前 英語研修 午後 アメリカの栄養士の講演
第10日目	午前 英語研修 午後 大学のカフェテリアの給食管理者の講演と内部見学
第11日目	午前 英語研修 午後 修了式
第12日目	ロサンゼルス出発 日付変更線通過
第13日目	中部国際空港着

語を理解していないことに気づいて、分かりやすい会話にしてくれた」ことに感謝し、ホストファミリーの気遣いを嬉しく思っていた。「親切で別れるのがつらかった」とも答えている。ロサンゼルスホームステイ先は学生を受け入れることに慣れている家庭ばかりであった。

ホームステイで学んだことについては「アメリカの食生活（知らない野菜が出た）」、「Yes, Noをはっきり言わないと質問されるのであいまいな答えをしない」、「アメリカ人は愛情表現が大きい」、「日本の良さ」とアメリカの生活事情」、「人と積極的にかかわることの大切さ」、「誠意があれば相手に伝わる」、「ジャンクフードは想像以上に食べていた」等いろいろな感想が述べられていた。よい感想も悪い感想も異文化の中で体験して感じたことばかりであった。現地では自分が外国人なのでしっかりと異文化を体験するようにと事前研修で指導してきたことを実践できたようである。

(2) 英語研修・英語力

参加者は英語を専門に学んでいる学生ではないので現地大学での英語研修については、午後の見学研修などに関連した内容を依頼した。学生たちの評価は、授業のレベルは「適当であった」が多かったが、「難しすぎた」と答える学生もいた。授業時間も「適当」と答える学生が多い一方で、「長すぎる」と答える学生も多くなってきている。そのためStarbucksでコーヒーを注文したり、郵便局で切手を買う実際の練習をさせてもらった。学生たちは練習しながら実践するのを楽しんでいたようである。栄養士の講演の前には午前の授業でアメリカの栄養士に聞きたいことを英語で用意しておき、実際に英語で質問することもできた。答えは通訳をしてもらった。

この研修全体で学生が自覚している英語力への影響についてのアンケートでは97%が「とても影響を与えた」「少しは影響を与えた」と答えており、以前報告した①第1回から第3回¹⁾、②第8回から第11回²⁾と同じ結果になっている。英語に対する気持ちの変化についても「英語への関心が増した」「聞く力が向上した」「間違いを恐れなくなった」「英語への抵抗がなくなった」が多く、これも①第1回から第3回¹⁾、②第8回から第11回²⁾と同様で、海外研修が英語への関心を高めるモチベーションになっていると言える。

(3) 人間的成長

この海外研修で得られたものとして、ほとんどの学生が人間的に「とても成長した」「少しは成長した」と答えている。英語が苦手であっても、日本で生活しているのとは違う環境の中で生活し、自分自身何か成長したと感じられるようである。年度によって参加人数が違うが、積極性・自立性・社交性・探究心・努力・気配りなどが成長したと自覚している。これも①第1回から第3回¹⁾、②第8回から第11回²⁾の報告とほぼ同じような結果になっている(図1)。

海外研修全体の感想や「行く前と行った後での気持ちの変化」についても「興味をもったことがいっぱいあってやりたいことが増えた」「日本だと個性があると目立つけど外国では個性の集まりだ」「アメリカでは選択肢が多いので自由だからこそ自分で考えて行動していかないといけないと分かった」と新しい発見をしたことがうかがえる。そして「海外旅行がもっと好きになり、他の国へ行きたくなった」「英語を勉強したい」「今やるべきことなどもっと自分のことは自分で自立し、もっと積極的になろうと思った」など前向きな答えも見られた。

後輩へのアドバイスでは「多くの人と出会うことができて自分の考え方を幅広くするチャンスだと思う」「2週間はあっという間です。思う存分楽しむためにも積極的な行動や会話コミュニケーションを心掛けることが大切」そして、多くの学生が単語だけでもいいから英語の勉強をしていくことを勧めている。

人間的成長は自分ですぐに感じることができるようなものではないかもしれないが、この海外研修に参加することによって心揺さぶられる経験をして、何かを

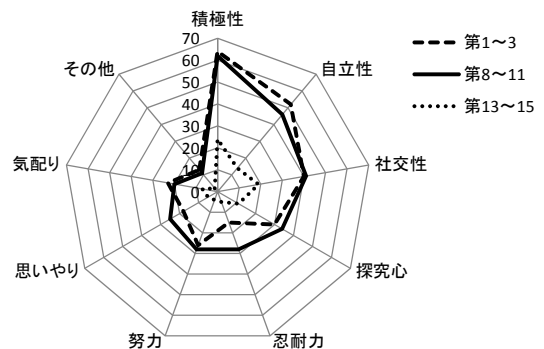


図1. 研修終了後学生が成長したと感じる点
(参加学生が複数回答した合計数)

得たことは確かなようで、学生自身が短期間に変わったと答えられる経験ができたと言える。

(4) 専門分野に関連した研修とその他

本学の専門分野である栄養士教育に関連した研修として、アメリカの栄養士の講演をプログラムに入れた。学生たちはアメリカにおける栄養士の活動について学ぶことができ、興味をもったようである。第13回の講師は糖尿病予防のための活動をしている方で、年代別に肥満が多くなっていく図を示して栄養士としての使命を話された。また、第14回第15回の栄養士からは栄養相談などをして健康を維持するための活動をしている話を聞いた。学生たちがこれから栄養士になる勉強をしていると聞いて、「自分のすることを好きになりなさい」とアドバイスしてくれた。学生たちは辞書を引きながらメモをとり、「栄養士になるための教育は何年かかるのか?」「大学の食堂でサラダの生野菜を学生たちが多く残すのはなぜ?」「栄養教諭というのはアメリカにはないの?」など、たくさんの質問をして時間を延長したほど、とても有意義な時間をもつことができた。学生たちはアメリカの食生活に相当興味を持ち、肥満が多いことや、1回の食事の量が多すぎることを話していた。ホームステイ先ではどの家庭でも日本食を1回は作ったようで、ロサンゼルスでは日本食がよく食べられること、箸の使い方も特別なものではないことも分かったようだ。学生たちは Nutrition Facts を学び意味も理解していて、こんなに情報があるのに栄養教育がきちんと行われていないことを実感し、アメリカと比べて「まだ日本のメタボリック・シンドロームはたいしたことではない」と報告書の中で書いている学生もいた。アメリカでの栄養・食事情を目にしたことは学生のこれからの栄養教育に大きな意義を持つものと思われる。

大学の給食設備の見学は給食管理者の話から始まり、1950年代の1人前の食べる食事の量が現在はこれだけ大量になっていると事例を並べて見せてくれた。栄養士が献立をたてているのではなくシェフが作ったメニューを管理者がチェックしていると聞いた。そのあとの給食施設内部見学は狭い厨房の中まで入れてもらい、早速学生から「衛生管理はどうなっているのですか?」という質問が出て、次の年からは外側から中を覗き込むだけになった。学生たちは前年のことは分からないため、中に入りたい希望が出ていたが、事情を話しすぐに理解してくれた。日本でもあまり経験し

ていない厨房の中の見学を外国で行ったので興味を持ってくれたようである。

3つのスーパーマーケットの比較見学はアメリカならではの、とてつもなく大きいショッピングモールで実施した。その中には食品のスーパーが3種類もあり、見学のための移動が簡単だということもあるが、安いことを売りにしている Trader Joes¹⁾、少し値段は高いが健康志向で有名な Whole Foods、日本食やアジア系の食品を扱っている店など特色ある店を説明してもらいながら回ることができた。学生たちは説明が済むとすぐに実際の買い物に走って行き、観光地ではない場所のお土産を手に入れることができた。食品の並べ方の違いや日本にない Rice Milk に興味をもった学生もいた。牛乳も日本と比べるとたくさんの種類があり、「大人は Low Fat Milk を飲み、Whole Milk は成長期の子供が飲みます」と言われ、驚いていた。

その他、大学キャンパス内でテニス・バスケットなどのスポーツの時間も取り入れた。せっかくロサンゼルスに来たので、ハリウッドやビバリーヒルズ、サンタモニカ、ディズニールランドも観光見学として入れたため、毎日忙しく予定が入り、学生からはゆっくりする時間がほしいという意見があった。しかし、どれをなくしたらいいかと聞くと英語授業時間を減らす希望になり、たくさんの経験をやめたいという意見は出なかった。体験学習が学生にとって意義あるものであったといえる。

4. 事前研修と3グループとの比較

本学では海外研修に出発する前の事前研修と海外研修を合わせた「海外生活事情」という科目を開講し、事前研修、海外研修、そしてその報告書を書いて学生は「海外生活事情」の単位になる。授業内容は以前報告²⁾した通り多義にわたっている。渡航手続きだけでなく、外国で生活する心構えや具体的に必要なものなども教えている。何のために海外研修に参加するのか意義を明確にして、心配解消のための時間と考えるようにと指導している。学生たちも出発前からよく質問し準備をして行くため有意義で楽しい研修ができていると感じており、「事前研修が役立った」と答える学生が100%で、①第1回から第3回の海外研修¹⁾、②第8回から第11回の海外研修²⁾と比べて多い。

「ホームステイでの話題づくり」という事前研修は、自己紹介だけでなく、自分の興味のあるものや日本のことについてホストファミリーと話ができるように準

備するためのものである。以前報告した①第1回から第3回¹⁾、②第8回から第11回²⁾の海外研修の時期は学生がホームステイでの生活を心配して、相当時間をかけてホストファミリーを喜ばせるものを準備していた。しかし、最近はなかなか出発前に十分な準備ができずにいるのが現状である。日本のことを聞かされても分からないことが多く、ホストファミリーとはその日にしたことを話すだけになっていることが多い。それでもホストファミリーと会話できたことは大きな喜びとして報告書に書かれている。一方で当初「ホームステイの話題づくり」で意図してきたことがなかなか実行されなくなっている。出発間際に「海外研修について期待や心配なこと」を聞くアンケート調査で、英語が心配であることについては以前報告した①第1回から第3回¹⁾、②第8回から第11回²⁾のグループともに同じであるが、①第1回から第3回¹⁾より、②第8回から第11回²⁾の学生、そして③第13回から第15回学生とだんだん心配だと思う気持ちが薄れている。「大変心配」が「少し心配」に変わってきている(図2)。

ホームステイについても①第1回から第3回¹⁾、②第8回から第11回²⁾、③第13回から第15回と研修を重ねるごとに「少し心配」から「あまり心配でない」に変わってきている(図3)。

事前研修で失敗談など多くのエピソードを話している結果、ホームステイはあまり心配ないと思うように

なってきたのか、情報が多くなっているために誰でもやっていることだと思い、心配ないと思うようになっていのかかもしれない。あえて事前研修で学生たちを不安がらせることは考えていないが、先輩のことばとして「準備をしていけばいくほどより楽しめる」という言葉を学生たちに伝えている。気楽な気分で参加するのではなく、準備をしていけばそこから得られる楽しみや感動は大きくなることを認識させることを重要と考えている。また、大学の海外研修という理由で気楽に参加する学生がいることは否定できない。学校の研修は教員と一緒にしかけることで自信がない学生に経験を積ませるものであるため、事前研修がとても重要である。然し、どこまで「話題づくり」などの事前研修を行っていいのかは課題である。経験を重ねた結果、教員の方が学生たちに期待をしすぎることも考えておかなければならない。

現地の大学で世話をしてくれていたスタッフの一人が急にアメリカ陸軍の予備兵の訓練が入ったため、数日留守をしたことがあった。帰ってきてから「1年後にアフガニスタンへ行くことになった」と学生に話をした際に、学生が「予備兵って何？行かなければいいのに」と答えるのを聞いて、本学の学生は世界情勢に興味がなく、訪れた国の実情を全く知らないことを思い知らされた。事前研修の中で現地を知るために情報収集の時間をとっているが、それが十分に活かされて

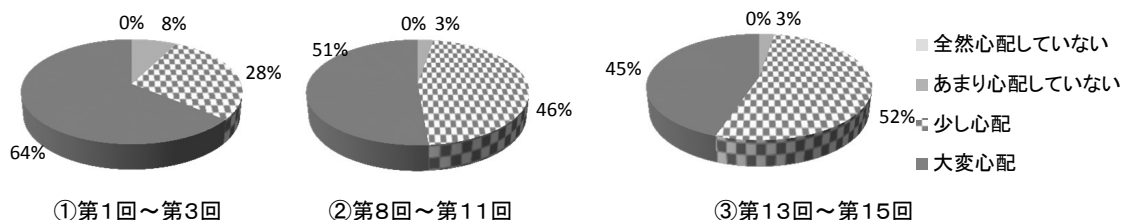


図2. 学生が海外研修前に英語について心配している程度

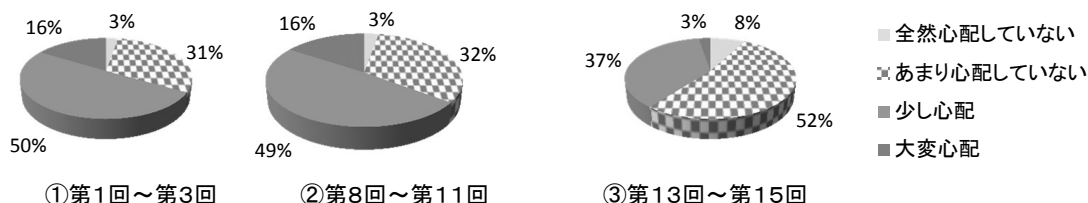


図3. 学生が海外研修前にホームステイについて心配している程度

いなかったといえる。海外研修は外国に行っているいろいろな経験をするにはあるが、何も知らないままではいけないと学生たちはいつ気がつくのかと心配する。知らないことが多いのは仕方がないことではあるが、教員としては学生たちにもっと興味のあるものや知っておくべきことを積極的に知ろうとする姿勢を持ってほしいと願う。今回はこの機会を逃さず帰国してからあの会話の意味を学生に説明できたが、自ら調べようという行動にはつながっていなかったのが分かった。目的意識を明確にもたせることが事前研修の意義ではあったが、自ら学ぶという姿勢も合わせて指導する必要性を痛切に感じた。

帰国後の報告書に関して、以前は海外研修のたぐさんの経験をなかなか自分のことばで文章にすることができず時間がかかっていたが、現在は報告書をスムーズに提出する学生が多い。内容はホームステイで楽しい経験をしたことが多くを占めている。「また行きたい」と書いている学生もいるのでこの経験が報告書で終わるだけでなく、継続させていく指導も大切である。①第1回から第3回¹⁾の時期はこの海外研修がきっかけで個人留学まで発展させた学生もいた。

5. おわりに

この海外研修を実施したロサンゼルス郊外にある大学は、美しく静かな山の上であり、そこからの景色はすばらしく、日本とは全く違う環境の中で過ごす生活は学生たちにとって忘れられないよい経験になったようである。

これまでの15回の海外研修に参加した学生は報告書やアンケート調査で参加してよかったと全員が答えている。さらに、ホームステイの異文化体験や専門分野に関連する体験研修が、英語研修よりも学生たちにとって良い経験であったと答えている。しかし、経済状態が悪く海外研修に参加できない学生がいることを考えると、大学としての海外研修を存続させるためには、大学側の協力が必要であると考えられる。

今後も海外研修に参加する意義を確認し、学生自らが積極的に行動して何が必要なのか準備する姿勢を養うことが海外研修とその事前研修では必要である。報告書やアンケート調査でも一番問題になっていた英語のコミュニケーションについては、事前研修の中だけで準備しようとしても十分にはできないので、学生自らが学ぶ姿勢をととのえることが重要と考える。

引用文献

- 1) 松田康子, 滝川桂子, 短期大学における短期海外研修の意義とこれからの課題, 名古屋文理短期大学紀要第23号(1998)参照.
- 2) 松田康子, 短期海外研修の意義とその事前研修について, 名古屋文理大学紀要第7号(2007)参照.

参考文献

- 1) ロサンゼルス海外研修報告書2009年3月, 名古屋文理大学短期大学部(2009).
- 2) ロサンゼルス海外研修報告書2010年3月, 名古屋文理大学短期大学部(2010).
- 3) ロサンゼルス海外研修報告書2011年3月, 名古屋文理大学短期大学部(2011).

謝辞

本海外研修実施にあたりご協力いただいた、滝川桂子先生、佐久間重先生、宮田修先生、名古屋文理大学・名古屋文理大学短期大学部の委員会の皆様へ厚くお礼申し上げます。